
偽クノイチ異界譚

蒼枝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

偽クノイチ異界譚

【Nコード】

N7892Z

【作者名】

蒼枝

【あらすじ】

神楽紫乃（21）は忍者村の忍者ショーのアクターとして働き、余暇には戦国オンラインという戦国時代をモデルにしたネットゲームを楽しむ生粋の時代劇オタク。

そんな彼女が世界同士の接触事故に巻き込まれ、とばされたのは異世界「フリーアス」

どうやら二つの世界間でマナをやりとりするための安全弁、と言う役割を負わされてしまったらしい。

世界の管理者からおわびとして「戦国オンライン」の自キャラと

同等の能力をいただいた紫乃は特に魔王がうんちやらというところも無いのでまったり異世界ライフを満喫することに。

序章（前書き）

蒼枝と申します。

長編を書くのは初めてです。

つたない文ですが、ご観想いただければ幸いです。

かるい百合展開、暴力シーン、残虐な展開があるかもしれません。
苦手な方はご注意を。

序章

序章

「…武藤陣内殿とお見受けする」

真つ昼間、町はずれの街道で典型的な忍者装束に身を包んだ細身の女が、浪人風で総髪（おんがみ）の男に問いかけた。

「忍びか…。さては越後屋に雇われたか。いかにも拙者が武藤陣内じゃ」

「潔いことだ。用件も分かっているようだな…その命、頂戴する」
女は身をすつと屈めると、逆手に短刀を構え浪人に向かって疾走した。

「簡単にくれてやる訳にはいかな！」

抜き打ちに放った浪人の刀が女の短刀を迎撃する。

鋼同士の激突に、街道に甲高い金属音が響くかと思われたが、

かしつ…

響いたのは何とも迫力のない軽い音だった…

『えー、これで午後の部の殺陣実演は終了となりま〜す』

忍者屋敷の中にある女性用控え室（スタッフルーム）で休憩していた私の耳に、そんな放送が流れてきた。

「これにて本日のお仕事終了、と」

終業時間を確認して、私は頭巾と鉢金を外してロッカーのフックに引っかけた。

現実的に考えれば、昼間っから真つ黒い忍者服を着るなどあり得ないし、武士相手に真つ正面から名乗りを上げて戦いを挑むなど忍

びの風上にも置けない(?) 所行である。

だがこれが観光地のイベントとなれば話は別だ。

新潟県の上越市と糸魚川市の間くらいにこの小さな村…というか観光地はあった。

過疎に過疎が進んだあげく廃村一歩手前になったこの村は、若者と観光客を呼び込む手段として村を忍者村として再開発したのだ。

まあ、忍者を観光に、というのも由来が無いではない。

こちら辺はかの上杉謙信侯のお膝元。軒猿のまざるという謙信侯お抱えの謀報集団がいたと言われているあたりなのだ。

で、高校卒業後、新潟市で仕事を探していた私こと、神楽紫乃かぐらしの(21)は、2年前故郷が忍者村へと再開発されたとの知らせを受け、内定しかけていた仕事を蹴って故郷へと帰ってきたのだ。

まあ、うら若き乙女がなんで忍者村!?!と思うかもしれないが、何の娯楽もなかったこの村では、じいちゃんと見た再放送の水戸黄門や必殺仕事人などの時代劇が唯一と言っていい私の娯楽だったのだ。

雀の魂百まで、の言葉通り、その後も順調に時代劇オタクへの道を進んだ私にとっては渡りに船な職場だったという訳。

「神楽さん、先上がるね〜」

「あ、お疲れ様〜」

先ほど私と殺陣を演じた甲斐さんというバイトの人がドア越しに声をかけて行く。

わざわざ女子が着替えている(かもしれない)ところまで来て声をかけていくとか、ちょっとどうかなと思うけど、まあ、この村は若い娘が極端に少ないからある程度仕方ない。

私程度の容姿でもけっこうもてるのだ…多少大目に見ている。

「それよりもっ…と」

私はロッカーの中からスマートフォンを取り出すとアプリを起動する。

『戦国の野望オンライン』

戦国時代をモデルにした架空の日本が舞台のネットゲームである。最近出たこのスマートフォン版は今まで私がプレイしていたパソコン版のアカウントとキャラクターを引き継いで使えるのですでに私のレベルはかなり高い。

忍者LV85、陰陽師LV76、鍛冶師LV60、薬師LV77
1アカウントで作れるキャラクターは4体、そのすべてがマスターレベルといわれる50を過ぎている。

装備も自キャラに鍛冶師がいるので不自由はしてない。

たぶん一対一なら「信長」や「家康」クラスのボスとだって勝てるはず。

取り巻きがうつつとうしいから現実には無理っぽいけど。

「さてと、今日はどの子にしようかな？」

どのキャラを選んでもすべて名前は統一して神楽紫かぐらむらしの乃と本名を使っているのは、古風な名前なので、意外と世界観に合っているのではと思っているから。

「クノイチちゃん君に決めた！」

スマートフォンの画面に映ったクノイチの姿をタッチしようとして…

そのまま私の指は画面に吸い込まれた。

森の中

「む…うん」

草いきれの臭いや土の感触に私は意識を取り戻した。

「…なに？」

視界一面に広がるのは木。そして草。広い空。

「え？」

いまいち状況が理解できない。

私はさっきまで忍者屋敷の中で戦国オンラインを…

なのになんで屋外に。しかも森の中に倒れているのだ？

場所自体は田舎だからちよつと山には入れればこんな所はいくらでもあるけど…

「忍者服のまま外出はしないわよね〜いくら私でも」

そう、服装はさっきの殺陣イベントの時のまま。鉢金と頭巾を外した忍者服のままだ。

「さらわれた、とか？でも拘束もしないで外に放り出すというのも変だよねえ…あ！スマートフォン！」

私は重大なことに気が付いた。さっきまで持っていたスマートフォンが、無い。

「うぎゃあ、個人情報のかたまりだよ？しかも戦オンのアカウント盗られたら目も当てられない」

さつさと村に戻ってスマホの停止手続きしないと…『ぴろりろりん』

「え」

聞き覚えのある音。メールの着信音だ。

「え、だってスマホ自体が無いのに「メール」が何で」

と言いかけた時、私の目前に浮かんだのは…メール画面。

まごうこと無き私が持っているスマートフォンの半透明な「画面だけ」が空中に浮かんでいた。

「な…」

私が絶句しているとその画面の中の新着メールが勝手に開く。

『拝啓 神楽様。突然のことですぞ驚かれていますでしょうが、こはあなたのいた地球、日本ではありません。フリーアスと呼ばれる、あなたから見れば「異界」です。』

「メールが透明で勝手に！しかも何その中2設定！」

『そんなこと言われても現実なので中2設定とか言っても仕方ないのです』

「メールがリアルタイムで返信！？むしろチャット！？」

私もいろいろ混乱しているんです。

『まずはフリーアス世界の管理者たるわたくしからお詫びを。』

今回の事故は全くの偶然なのですが遠因はこちらの世界にあるので

…』

「…続けて？」

とりあえずこの空中ウインドウみたいな技術はこんな森の中でできるコトじゃないはずだ。何か異常な事態であるということは分かる。であれば、まずは情報を得なければ。

『私たちの世界フリーアスは元々あなた方の世界とごく近い位相に存在していたのですが、あなた方が科学技術を発展させたように、私たちの世界では魔導技術が発展したのです。』

「ふんふん」

『…ですが人間達や魔物が使う「魔法」や「魔導」が少しずつ世界の「マナ」を消費して…崩壊の危機に陥っていたのです』

「マナ？」

『魔力や魔法の元となる、世界にあまねく存在するエネルギーです。世界が世界として現実に存在する為の力、といっても良いかもしれません』

「それが無くなるってコトはどうなるの？」

『存在が無くなります。フリーアスという世界は「元々無かった」ことになるのです』

「まさか、それをなんとかしてくれってこと？ テンプレ召還め……」

『いえ、それはすでに解決しました』

「はん！？」

解決したんなら帰して下さい。てか、今までの説明は何？

『正確に言えば神楽さんがこちらの世界にいることで絶賛解決中です』

なおさら訳分からん。

『ごく近い位相に二つの世界はあると言いましたが、あまりに近すぎて…こちらのファリアス世界は磁石に吸い寄せられるようにマナが溢れるそちらの地球に引き寄せられていったのです』

「マナなんてファントジーな力、ウチの地球にはなかったと思うけど」

『そちらは世界構造自体が魔法が発現しない作りになっていますから、マナがあっても使い道が無く、時間とともにどんどん増えていったのです。こちらの世界とは別の意味で世界に悪影響を与えかねないほどに』

「それで足りないそちらと、ただ余りの地球と…世界同士をくっつけてマナをどうにかしようって？」

『世界同士の引力にまかせて、ただ接触するのを放っておいたら救世どころか世界崩壊です…なので私とそちらの世界の管理者はなんとかお互いの世界のごく一部が接触した時点で固定し、少しずつマナがこちらに流れるようにしたのです、が』

「が？」

いやな予感しかしない。

『…その接触地点にピンポイントに神楽さんがいて…神楽さんは地球からファリアスへのマナの通り道としてこちらの世界に固定されてしまったのです』

「なんじゃそりゃあああああああああ！…！」

『す、すみませんすみません…』

「こ、固定されたって…帰れないの？」

『現時点ではマナの流れ込んでくる勢いが強すぎて…1000年ほどたてばなんとかお帰しできると思いますが』

「塵も残ってないよっ！1000年!？」

『あ、流れ込んでくるマナの影響でほぼ不老なので、1000年どころか10000年でも問題ないです』

「……」

『あつ、それにほら、接触した時使っていたデータデバイス…「すまふお」の「戦オン」のデータもなるべく反映しておきましたから!こちらの世界でも生活するに困らないと思っんです!』

「はい?戦オンを反映?」

『うん、名前も一緒だし容姿も近かったし、本人との関連づけが楽だったからサービスしました』

「いや、しときましたって…まあ、生活に困らないなら良いか…それこそなんて中2設定」

『ずいぶんあっさり納得されますね』

「うーん、向こうにはもう家族もないしね。帰れないなら帰れないで前向きにこれからのことを」「きゃああああああっ!!」
説明の途中で突如森に響き渡る女性の悲鳴。

うん、中2設定の上にテンプレですね…

「これ、助けに行った方が良いよね…?」

『私はあくまで管理者ですので、どうこうしろとは言えません。が、能力的には楽勝レベルかと』

「うう…わかったわよ、行きますよ。寝覚め悪い思いするのモヤだし…」

『ちなみに「技能」もそのまま使えますから…がんばって下さいね…私はこれ以上干渉できないのでこれからはあまりご連絡できなくなると思いますが』

「えっ!?!?ちよ…」

それを最後にプツン…とメール画面は閉じてしまった。無責任な

やつだ。

「もう…技能スキルが使えるって行ってたな…「技能変更」とでも言えば…おっと」

目の前にスマフォの画面が再び現れる。ただし今度は「戦オン」の技能編集画面だ。

「とりあえず雑魚狩りセットかな…」

私が事前に設定しておいた技能セットから「雑魚狩りセット」をタッチ。すると…

「おお、体が軽い。移動補助「疾風」の効果かな」

疾風、健脚、回避術極意、会心の一撃、三連撃、不意打ち、火遁の術、反撃術極意、隠れ身、二刀流

がセットされた事が頭の中に情報として入ってくる。

さて、とりあえずいろいろ悩むのは後にしてイベントクリアと行きますか。

初戦闘

「何、何なのアレは」

「こんな街に近い森の中で…ただの蛇ならともかくスケイルヴァイパーってCランク魔獣じゃないのっ！」

「お、お前ら助けるよ！高い金払ってんだから！」

「やれるだけはやってみますがね…最悪荷を捨てて逃げる準備をして下さいよ？」

「ばっ、馬鹿を言うな、七色朝顔40株だぞ！？いくらすると…」
私が悲鳴の聞こえたあたりに付いた頃は…修羅場も佳境だった。

二頭立ての馬車の陰に隠れているのは小太りの男…その彼を守るように三人の男女が武器を構えて立っている。

それと退治するのは二メートル以上はありそうな蛇？まるで鎧をつけたような外殻を持つ蛇が5〜6匹。

「あの…お手伝いしましょうか？」

「うお！？あんたどこから…ま、まあいい、報酬は出すから奴らを追いついてくれ！」

私がとりあえず一番近い所にいた小太りの男に声をかけると男は一も二もなくうなずいた。

ふむ、報酬ね。覚えておきましょう。

とりあえず『隠れ身』をまとつて大蛇の後ろに移動してから『不意打ち』を発動。

あ、武器装備してなかった。まあいいか。こいつら弱そうだし。

大蛇の一匹に私の手刀がたたき込まれると同時にその首は「すばーんっ」と小気味よい音を発して胴体から転げ落ちた。

不意打ちだけじゃなく『会心の一撃』も発動したらしい。

「なっ…」

「どこから？てゆうか誰!？」

「素手でつて…なに？スケイルヴァイパーの首つて素手で刈れる

もんなの!？」

隠れ身はすでに攻撃開始と同時に解除されている。でもたぶんこの程度の敵なら問題ないみたい。

さつきから残りの四匹（一体は男の人がその巨体で押しとどめている）が私を敵と認識したのか一斉に攻撃を仕掛けていているんだけど掠りもしないのだ。『回避術極意』の成果だろう。

「あ、こっちは私がお相手しますので、そっちのおっきい男の人を手伝ってあげて下さい」

「無茶よ！一人で四匹って…全然余裕そうね…わかったわ、誰だか知らないけどありがとう！キュアリー、ゴージャックの旦那を援護するよ！回復魔法の準備をして！」

「わ、わかったクイン！」

ふーん、ゴージャックにクインにキュアリーね。大剣を持った筋肉の塊みたいな大男の戦士がゴージャック、体にびったり革鎧にショートソードっぽいを持った銀髪のグラマラスお姉様がクイン、若草色のマントに身を包んだ栗色の髪の少女がキュアリー…かな。

などとつらつら考えながらも私の体は大蛇の攻撃を自動で回避し『反撃術極意』によって無意識にカウンターを叩き込みクリティカルヒットを量産していく。

「うりゃあ!!!止めだ!『岩斬剣』!!!!」

「『ゲイルスラッシュ』!!!」

「かの者達に祝福を!『キュアライトウーンズ』!」

私が最後の一匹の首をはねたのと同様くらいに向こうの三人も大蛇を始末したようだった。

「ぜー、ぜー、ざ、ざまあみやがれ」

「はっ、はっ…クラスの中でもっ…こいつらは「堅い」「避ける」「麻痺毒付き」の三拍子そろった厄介なやつだからね」

「おう、お前らの援護があつて助かったぜ…って、そっちの敵はどうしたんだ？まさか…」

「うん、さつき助けに来てくれた彼女が四匹とも一人であっさり

…」

「うわー、凄いね、ほとんど一撃だよ」

「信じらんねえ凄腕だな…すまねえ、姐さん、助かったよ」

彼らの心からの賞賛と感謝がくすぐったくも居心地悪い…私の力は偶然手に入れたチート能力のおかげなのであって、彼らみたいに命をかけて磨いた物ではないのだ。

「おお、貴様ら良くやったぞ！さあ、護衛ども、ぐずぐずしないで街へ向かうぞ。今日中に納品しなければならん」

どうやら小太りの男は商人で、戦っていた三人は雇われた護衛、ということなのかな。

「ああ、ちいと待って下さいよ…こいつらの額の熱感知宝珠は討伐証明部位だ。これだけでも持つて行かないとな…キュアリー、その間に御者の嬢ちゃんのを傷を見てやれ」

「うん」

ん？彼らの他にも同行者がいたのか、とキュアリーについて行ってみると…馬車の反対側に小柄な少女が倒れていた。

おお、ネコミミ尻尾付きだ。凶悪に可愛い…が、右腕がほとんど付け根から取れかけている。痛そう。

「ふん、放っておけ！片腕をちぎられたんだ、傷を癒しても片腕じゃ御者はできん」

「…あんたの所有奴隷だろ」

「だからだ！あんな獣人の小娘、夜伽にも使えなければ娼館に売り払うこともできん…格安だからと護衛兼雑用買い取ってみればあつという間に隻腕だ。大損だわ！」

「…この…」

「ゴージャック、やめときな…コスイネンの旦那、せめて街までは連れてつて良いかい？こんな所に置き去りにしちゃあ、いくらなんでも悪評が立つよ」

「む…仕方ないな」

クインが商人…コスイネン（笑）の利を諭して説得する。ぐっじ

よぶだ！

でも、なんとかできないかな…街についてもそのまま放置じゃ結局のたれ死にしそう。

奴隷の中でも彼女はかなり値が安いらしいし、片腕ではできる仕事も多くは無かるう。

んーもしかして、なんとかできるか？

私は『戦オン』所持品欄を呼び出し、所持品を確認する。これらが実際に使えるのであれば…私は意を決してコスイネン（笑）に声をかけた。

「あの」

「ん、おお！先ほどの！見ておりましたぞ！いやあ、お強い！助かりました…どうです、あの役立たず共のかわりに私の商会の専属護衛として雇われませんか？」

「あはは、ごめんなさい、ちょっとやることがあるので…それより」

「うん？なんじゃ？」

「報酬を下さると、先ほどおっしゃいましたね？」

「うん？うーん、言った、かな？」

とたんに苦々しげな顔になるコスイネン。

「言・い・ま・し・た・よ・ね？」

「あー、言った！言ったが今は荷を売りに行く最中で余計な金はないぞ！」

往生際が悪いなこのデブ。

「ご安心を。お金ではなく、彼女、譲っていただけませんか？」

「彼女…て、あの獣人女か？そんなので良いのか」

「ええ、ただ今後の所有権のことで揉めたくはありませんので、きつちりと正式な手続きによる譲渡をお願いしたいのですが。良いですか？」

「あ…ああ、そんな事ならお安いことじゃが…ネイル！こっちは来い！」

キュアリーさんに治療して貰ってすでに出血は止まっているネコミミ少女、ネイルちゃん。

その真つ白な肩までの髪が血に染まっている。見ていて痛々しい。「いいか、お前のような役立たずをこちらの方が貰って下さるそつだ。誠心誠意尽くすがいい」

こくり、と頷くネイルちゃん。

「では譲渡契約を…その獣人の首輪に触って下され」

「?こつ?」

「結構。おお、そういえばあなた様のお名前をお聞きしていませんでしたな」

「シノ・カグラよ」

一瞬偽名を使おうとも思ったが、正式に手続きを踏んで貰い受けるのであれば偽名はまずいと思ひ直し本名を名乗る。

「うむ、それでは譲渡手続きを始める」

コスイネンもネイルちゃんの首輪に手を触れる。

「契約神プロミスに申し上げる。セコビツチ商会コスイネン所有の奴隷ネイルをシノ・カグラ殿に無償にて譲渡する。シノ・カグラ殿及び奴隷ネイルはこれを了承するか?」

その言葉と同時にネイルちゃんの首輪を中心につつすらと光が広がる。何これ。

「了承します」

私とその光にぼけつとしてしているとネイルちゃんの声が聞こえた。なるほど、これが「正式な譲渡」なのね。

と言うことは、私も答えなきゃいけないのだろう。二人に対して問いかけてたし。

「りよ、了承するわ」

「よろしい、これで譲渡手続きは完了した。ネイルは煮るなり焼くなり好きにしていいますぞ」

「そんなんしないわよ。愛でるに決まっているじゃない」
静かに収まっていく光を見ながら私はきっぱりと答える。

「こんなつ…ふわっふわな尻尾なのよ！？耳なんかもふもふよ！
？これを愛でないでどうするの！？」

「いや…まあ、人それぞれですからな…」

隻腕の獣人少女を愛でると言いきる私に引き気味のコスイネン。

「シノ殿っていつのか…ありがとうな。その、いろいろと。俺は
ゴーバツク。18レベルの『戦士』だ」

くすんだ短めの金髪、大剣を背負った大男の戦士…ゴーバツクが
手を差し出し握手を求めながら自己紹介をする。

いろいろ、には私がネイルを引き取ったことも入っているんだろ
う。敵つい顔に似合わない人だ。

ん？18レベルって言ったな。この世界ってレベル制なの？魔法
といいレベルといい、そのまんまRPGの世界だな。

「わたしはクイン。『レンジャー』でレベルは15。感謝するわ
シノさん」

体にぴったりの革鎧に銀髪のグラマラスお姉様クインもショート
ソードを納めてあいさつ。

あーよく見ると凄い美人さんだ。この人。女の私でもお色気でく
らくらくる。

「お金はないけど、とりあえずこれは感謝の証し…ね？ちゅっ」
クインさんは私を両腕の中に納めてハグすると、私の耳に軽くキ
スをした。

うぎゃああああ！田舎モンの私には刺激が強すぎるですよ！百合
百合な道に走ったらどうしてくれませんか！

「うふふ。照れちゃってかーわいい」

「あ、あの、ありがとうございました。私はキュアリー。レベル
13の『治療術師』です」

若草色のマントに身を包んだ栗色の髪の少女、キュアリーが私の
そばに駆け寄ってきて上目遣いで尊敬のまなざしを向けてくる。

クインさんが大輪の赤い薔薇ならキュアリーは清楚な白菊。方向
性は違うけどめっちゃくちゃ可愛い。

ネイルも耳さえ無ければ人間の美少女と言っていていい容姿だし、この世界のおなごは美形がデフォルトなのか？

すると私の容姿は、この世界ではそこらの雑草レベルか？ちよつと落ち込む。

「あ…ネイルです。『雑益奴隷』レベル1です。どうかよろしくお願いします…ご主人様」

片腕を亡くしたのがショックなのか、感情のこもらない声で挨拶するネイル。

「ごめんね、もう少しまってね。

「神楽紫乃…こちらの読み方だとシノ・カグラかな。『クノイチ』よ。レベルは内緒」

戦オンのレベルとこちらの世界のレベル制とが対応しているか解らないのでぼかして挨拶に答える。

「うんうん、あんまり高レベルだと知られると依頼が殺到したり、いろいろ面倒なことも多いからな。そこら辺は気にしないさー。しかし、クノイチ…ね。聞いたことのないジョブだなあ。クイン、解るか？」

「んー、私も初めて聞いた。だが戦闘の様子からして、スピードと技量に重きを置いた『軽戦士』のさらに上位ジョブ…もしかしたら隠しジョブかもね」

…なんかまた解らない言葉が出てきたな。ジョブに上位ジョブ？職業って事？RPGの転職システムみたいなものかしらん。

「う、うんそんな感じかな」

適当に話を合わせておく…後でネイルにいろいろ聞こう。

「ま、まあそれより…ネイルの治療をしちゃいましょうか」
ちよつと強引だけど話をずらそう。

「…ごめんなさい、私の技量ではこれ以上の治療は…」
泣きそうになっているキュアリー。

「あ、ちがうのっ！私、たまたま良い薬を持っていてね、効くかどうかは解らないけど試すだけ試してみようかなーって…」

何で皆さんそんな驚いた顔をしてらっしゃいますか。特にコスイン。

「ど、奴隷にそんな高価な…部位欠損を直せるような魔法薬を使うとー!?」

「いや、まあ…効くかどうかは解りませんって。試しにですよ」
「いかな、奴隷に薬って普通は使わないのか？」

私は所持品一覧から薬師のキャラで作ってストックしてあった丸薬をいくつか取り出す。

清涼丹…各種状態異常の完全解除。

万金丹…体力の完全回復。

再生丹…部位欠損（一カ所）の回復。

どれもお店で買うとかなり高価だが、クノイチの採集技能で材料を集め、薬師が生成…と手間以外元手はかかってない。

あの自称世界の管理者は戦オンのデータをなるべく反映したと言っていた。なら、たぶん…

「はい、これ飲んで」

懐から出したふりをしてそれぞれ一錠ずつネイルの左手に受け取らせる。

「あ、あのっ！こんな高そうなお薬っ！いただけません！」

「…ネイルは私の奴隷でしょ？」

「は、はい」

「なら黙って飲む。私は自分の物には手入れを欠かさない夕チなの」

「は…はい」

覚悟を決めたのかやっとネイルは三つの薬を飲み込んでくれた。するとみるみる劇的に効果が現れた。

「あ、あ、あ、あ、あ、あああああああっ！！」

ネイルの全身が光り輝き、体全体に散っていた青あざがまず消えていく。

「あ、熱いですっ！ご主人様ああああっ！」

だ、大丈夫かな。過剰反応過ぎるような気もする。抱きしめてあげれば少しは安心するかな。

「大丈夫、ネイル、落ち着いて」

両手の中に抱きしめて背中をぽんぽんと軽く叩いてやる。

「あっああ…」

光が収まりネイルも落ち着いた所で確認すると…

ネイルの右腕はつるつるの綺麗なお肌で再生していた。

「…おいおい、すげえな…！こんな劇的な効果を持つ薬なんて、それこそエリクサーレベルじゃねえか」

「…そうね、売れば一財産よ。それこそ雑益奴隷どころか一流の性奴隷だつて買えるくらいいのね」

「うう、自信なくします…」

護衛三人組の言葉にびっくり。こつちの世界ではそんな高価なのか。いよいよとなつたら売りさばけば金銭面では何とかなりそうだけど…あんまり目立ちたくないし最後の手段にしとこう。

「ネイル、大丈夫？どこかおかしい所はない？」

「は、い、ご主人様…どこも…」

呆然と自分の新しい腕を見つめるネイル。

「ご主人様…変です。マナの動きが以前よりはつきり解ります…それに…私、魔力なんてほとんど無かつたはずなのに、今は溢れるくらい感じるんです！」

「ありや、薬の副作用？と思ったその時…『ぴろりろりん』とメールの着信音。」

『あなたは世界のマナの出口なんだから、うかつに「好意を持って」ハグしちゃったりすると相手にマナ…魔力を分け与えちゃうわよ。気をつけてね』

もう連絡しないつて言つてたくせに…つて、ネイルの異常は薬じゃなくて私のせいかつ！

「ご主人様…」

目が潤んで色っぽいんですけど。ネイルさん。

「わたし、一生ご主人様に尽くします！たとえ奴隷契約が切れても、生涯この身はご主人様の物です…。」

そう言うとネイルは私の足下にひざまずき、私の足の甲に口付けた。

「そ、そんなことしないでいいの…でも、そうね、私はこの大陸には不案内だから、いろいろ力になってくれると嬉しいわ」

そつとネイルの手を取って立たせてやる。

「はいっ！ご主人様、私にできることなら何なりと！」

正直ネイルの宣誓にちよつと萌えたのは秘密だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7892z/>

偽クノイチ異界譚

2011年12月25日13時48分発行